

日本古典鑑賞講座

第十二卷

太平記・曾我物語・義經記

昭和三十五年二月十五日 印刷
昭和三十五年二月二十日 發行

定價三八〇圓

編者 岡見正雄
角川源義

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子

發行所 株式會社 角川書店
かどかわしよてん

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京 一九五二〇八
電話九段(331)〇一一一〇二五

落丁・亂丁本はおとりかえいたします

太平記

角川源義
編

解説

太平記

【はじめに——南北朝動亂の戦記物としての『太平記』】 中世の文學史の上に軍記物といわれる一群の作品がうまれて來た。それらの中に『平家物語』と『太平記』は中世初期と中世後期を代表する軍記物であつた。本書におさめた『太平記』は流布本は四十卷、劔巻が附加してあり、その内容は別に太平記物語にまとめたように、後醍醐天皇の時代、執權北條高時を亡ぼした建武の中興の時代から足利尊氏が天皇にそむき、天皇は吉野の行宮に崩御されたその前後の諸將の反覆常なき動亂の時代の世相をうつし、將軍義滿を輔佐した細川頼之が執筆になり、南北朝合一の直前までの時代をともかく記述してあるのである。これを通讀してゆくと、『平家物語』と比べて、その文學的價值は劣ることとは否定できないが、なお時代そのものが問題の時代であるという點において、興味をもつて通讀することができ、從來云われるように、その初めの部分は比較的文章もしまり、楠木正成の活躍など興味の深いところがあるのである。本書の量の制限された關係からも、私は始めの部分を手許にある寛永八年整版本をもとし、他の寫本を参照し本文を作りここに收め、脚注を附し、解説鑑賞したが、訓については必ずしも整版本には従わなかつた。『太平記』は何よりも物語僧の語り物であつたと思う。物語僧は半僧半俗の隠者、知識人で、その中核に時宗の聖がいたと私は想像しているが、ともあれ、眼の前で流轉する世相を横から傍觀し、それを物語書にして、讀誦したのだらう。『明德記』は南北朝時代の合一の後、暫くつづいた平和のうちに起きた小動亂を内容とした小軍記物であるが、明德の亂がおさ

まつた應永三年の作者自筆本を寫した寫本が存する（富倉博士校岩波文庫本）。恐らく動亂のすぐ後に物語僧——恐らく時宗——によつて作られたのである。『太平記』は室町時代の公卿の日記を見ると多く禪宗の寺院で談義の後に誦まれていることは注意すべきである（『後法興院記』文正元年五月廿六日）。物語僧は『蔭涼軒日録』の一峯（『蔭涼軒日録』永享十年正月廿五日）のように禪宗の寺院に出入している。『太平記』にしても『曾我物語』にしても事件の後にすぐ語り物としてでき、成長し、書き繼がれて來たものであらうが、『太平記』の作者には禪的な教養もその背後にあつたのではない。例えば古來『太平記』の中に愛誦された「落花の雪」（俊基朝臣再關東下向の事）の條に、「再犯赦されざるは法令の定むる所」と云う詞句があるが、その出典は脚注に示したように、禪關係のものにあるのではない。私は脚注に彫りを深くして、また解説に例えば「隅田、高橋」（卷六、楠木天王寺に出張る事）の隅田黨關係の文書とか、惡黨と云われることの證に引かれる楠木關係の文書とか、文書をできるだけ比較に出して見た。

【名稱、諸傳本、作者、成立など】『太平記』はその名については何故「太平記」と云うか諸説がある。「太平」は反語であるとの説もあり（『太平記鈔』、『太平記理盡抄』によると「安危由來記」「國家治亂記」「國家太平記」「天下太平記」と四度改められたとするが、「太平記」の名は始からあつたとするのが穩當であらう。「諸大名馳參唱太平」（『看聞御記』應永廿四年三月廿一日）というような使い方から考えても戰亂の一時治まつた時には筆を措いた時があつたのである。

現存の流布本は四十卷本であるが、流布本に比べて古本と言われるものは卷二十二の有無が問題にされ、卷二十二を闕く諸本では神田本・西源院本などが複刻されている。その他南都本・國立圖書館藏築田本・今川本（陽明文庫本）・東京文理大本など諸寫本が多い。卷二十二を設けたものに梵舜本（前田家本）毛利本などがあり、流布本系の慶長七年五十川了庵刊の片假名交り十二行本、慶長八年版の古活字版、元和八年片假名整版などがある（岩波講座、日本文學『太平記』龜田純一郎氏論稿、『西京高校研究記要』第三輯、「太平記諸本の研究」高橋貞一氏論稿等参照）。

作者としては毘沙門堂の圓大曆に「傳聞去廿八九日之間小嶋法師圓寂云々、是近日翫天下太平記作者也 凡雖爲卑賤之器有名匠聞可謂無念」（應安七年五月三日條）とあるのが引かれ、種々に解釋され論ぜられる。また今川了俊の『難太平記』には「昔等持寺にて法勝寺の惠珍上人此記を先三十餘卷持參し給ひて錦小路殿の御目にかけられしを、玄惠法印によませられしに、おほく惡ことも誤も有しかば、仰に云、是は且見及ぶ中にも以の外ちかひめおほし。追て書入。又切出すべき事等有。其程不可有外聞之由仰有し。御に中絶也。近代重て書續けり。……」云々とあるのが引かれる。とにかく書き繼がれ、成長したことが考えられる。また内容を三部に分け、建武中興の前後の卷一から卷十二、第二部は卷十三から建武中興がくずれ、正成など皆戰死し、後醍醐天皇が崩御し、足利幕府が漸く固まつて来る卷二十一まで、第三部は卷廿一から幕府の諸將に反覆常なく頼之が執事（管領）となり義満が將軍になる卷廿一から卷四十までの三部に分ける説が近來行われている。本書は成立後すぐに秋の夜の長物語などに影響する所が多く、室町時代の記録にその名が多く見える。近世になつては太平記讀みに誦まれ、講釋されていた。近世の講談の席は太平記場と云われたほどである。

（岡見正雄）

曾我物語 建久四年五月二十八日、源頼朝の富士の裾野の狩倉で曾我兄弟が親の仇工藤祐經を討つた。『曾我物語』はこれに取材し、事件のそもその發端から説かれてゐる。伊豆に配流の憂目にあつた頼朝の艶聞や悲劇、また頼朝の擧兵など、『平家物語』のある程度「東國版」の要素をも持つてゐることは注意すべきであらう。流布本『曾我物語』は兄弟の生いたちから青年期までの記述に、佛教説話を多く取り入れ、中國、日本の故事の多くを挿入しつつ、『平家物語』にならつて十二卷本に發展させたかと思えるかなりの無理もかかてゐる。現存の『曾我物語』では眞字本が古い、この眞字本は安居院の『神道集』と密接な關聯をもつていて、南北朝初期よりさかのぼると考えられている。この眞字本を假名本に改めたのが大石寺本である。従つて大石寺本は現行の假名流布本とは無關係である。眞字本に諸種の傳本があるが、簡単に云えば近年重要文化財に指定された伊東祐淳氏所藏の眞字本がもつとも傳來の上で、

よるべきものであらう。眞字本の活版本としては存採叢書本があるが、校訂に信を置くことが出来ない。伊東本の刊行がまたれるわけである。假名流布本の中の異本と云えるものに荒木良雄氏校訂の大山寺本がある。これは曾我敵討の後日譚がないのが特色である。播州大山寺に盲僧がいて、これをテキストに使っていたと考えられるが、仇討後日譚がない理由は簡単に云えない。眞字本などはむしろ後日譚の方が面白いほどで、流布本成立時代には後日譚もかなり成長している筈である。管見では故武田祐吉博士所藏の流布本が善本のように思える。私は學生時代にこの武田本を書寫することを許され、それが私の『曾我物語』研究の動機の一つとなつてゐる故、武田本の刊行を私の義務と考えてゐる。『曾我物語』の成立については、「曾我物語ノート」に書いたように正本を持つ前に仇討直後に語られていたと思つてゐる。この本文には貞享四年の刊本を底本とし、大山寺本、王堂本（岩波文庫）、武田本、眞名本（伊東本）を参照しつつ脚註をほどこした。

義經記

（角川源義）

【名稱】一人の個人を取り扱い、『曾我物語』とともに他の軍記物とは毛色の變つた『義經記』は八卷から成るが、寫本には『判官物語』『義經物語』となつてゐるものがある。この場合は卷八の「繼信兄弟御弔の事」が缺けてゐるのが特徴であり、これ等は古本系の場合が多い。諸傳本・流布本系の『義經記』は寫本としても存するが、近世十一行本活字本等の古活字本、整版系の寛永十二年版、元祿十年版等種類が多い。本活字本系は善本である。

【成立】『義經記』は英雄義經の世盛りを『平家物語』にゆずり、その幼年時代のエピソードと没落時代の悲話を内容とし、いわゆる判官眞眞（さかんまこと）の所産であるが、卷五に天龍寺の名等が見えることが指摘され、南北朝時代まではさかのぼらぬものと考えられるが、室町中期までは下らぬのではないか、例えば本講座の本文に引用したような印地大將などの詞は室町初期に成立した一つの證となると思う。『義經記』はそれ以後の幸若舞・謡曲・近世文學に影響するところが多かつた。歌舞伎の勸進帳のように辨慶が活躍するのは『義經記』以後の著しい特徴である。それとともに『太

平記』『曾我物語』のようなくだしい故事を引かないのはその特徴の一つで、御伽草子にむしろ通ずるような語彙を含み、民族文學的な要素に富んでいると言えよう。本書では十一行木活字本を元にして本文を作った。なお判官物語系の古寫本などの文詞を見ると決してリズムカルではないが、やはり一種の語り物、素語り的なものではなかつたかと思つてゐることだけは附言して置こう。なお作者については一個人を考へることは『義經記』においては意味のないことであると思う。『義經記』はいわゆる義經傳説の集大成であつた。いわゆる義經傳説については島津久基博士に「義經傳説と文學」がある。

(岡見正雄)

備後三郎高德が事(卷四)

一四

兒島山伏(五二)

相模入道田樂を弄ぶ并びに闘犬の事(卷五)

一五

田樂の外他事なく候(二五) 天王寺の未來記(二六)

大塔宮熊野落ちの事(卷五)

一六

大塔宮熊野へ入る(二六) 満山の護法(二七) 十津川の山

嶽武士(二八)

楠木天王寺に出張る事(卷六)

一七

隅田黨のことなど(二九)

正成天王寺未來記披見の事

一八

未來記(三〇)

會我物語

二〇

會我物語ノート

角川源義

二二

語り物の成立事情(三三) 「義經記」の成立(三三) 敵討という「美德」(三三) 北條執權下の『會我物語』(三三) 關東中心の語り物(三三) 『義經記』と『會我物語』(三三) なぜ『會我物語』は庶民の支持を得たか(三四) 農民生活と會我五郎の怨靈(三四) 初期の『會我物語』(三三) 『吾妻鏡』と『會我物語』(三三) 『會我物語』と箱根の唱導(三七) 眞

字本『會我物語』と安居院(三七) 時衆教團と『會我物語』(三三) 關東の時衆道場と『會我物語』(三三) 上野國板鼻道場と語り物(三三) 『會我物語』の開花(三三)

會我物語

角川源義

三五

九月十三夜名ある月に一萬箱王庭に出て父の事を歎きし事(卷三)

三五

物語の發端(三三) 唱導文藝としての『會我物語』(三七) 嘆きの語り(三三) 九月十三夜の月(三三)

小袖乞の事(卷七)

三〇

小袖乞い(三三) 文藝の趣向の問題(三三) 幸若舞(三三) 五郎の勘當(三三) 神となる資格(三三) 京の小次郎と越後國上寺の法師(三三) 敵討前後(三七)

箱根にて暇乞の事(卷八)

三六

箱根權現神寶の太刀・刀(三三) 『平家物語』劔卷(三三) 『會我物語』の成立(三三)

鬼王團三郎會我へ歸りし事(卷十)

三四

高野聖としての鬼王・團三郎(三七) 旅する文藝家(三三) 八百比丘尼の墓(三三) 一人稱の自敘傳(三三)

兄弟神にいははるる事(卷十一)

三六

御靈信仰としての『會我物語』(三五) 時衆教團と怨靈供養

(三五四) 曾我怨靈譚の流行 (三五四)

虎と少將法然に逢ひ奉りし事 (卷十二)

二五七

虎大磯に閉ぢ籠りし事 (卷十二)

二五六

遊女の援助 (三五六) 大磯の虎の廻國 (三五六) 善光寺詣で
(三五六) 流布本と法然上人 (三五六) 大磯の高麗寺 (三五六)

義經記

二六五

義經記物語

岡見 正雄

二六七

牛若丸と鞍馬入・奥州下り (二六六) 海道下り (二六六) 辨慶
説話と頼朝の舉兵 (二六六) 義經都落ち (二六七) 吉野山の義
經一行 (二六七) 忠信の最期と靜御前 (二六八) 義經北國下り
(二六八) 衣川合戦 (二六八)

義經記

岡見 正雄

二七五

義經鬼一法眼が所へ御出の事 (卷二)

二七五

白川印地 (二六六) 鬼一法眼の説話 (二六六)

辨慶義經に君臣の契約申す事 (卷三)

二九八

牛若辨慶切合風情 (三〇〇)

太平記・曾我物語・義經記の窓

三〇九

海の英雄

角川 源義

三二一

——『太平記』の成立をめぐる——

吉野朝の悲歌 (三二二) 熊野の水軍 (三二三) 北畠親房と熊野
水軍 (三二三) 兒島半島と熊野信仰 (三二六) 兒島と兒島高德
(三二七)

正成と尊氏

上横手 雅敬

三三二

正成の豪語 (三三三) 赤坂・千劍破の攻防 (三三三) 「謀」の勝
利 (三三三) 正成の過去 (三三四) 坂東武者 (三三四) 天王寺
の戦 (三三五) 東國の風儀 (三三五) 尊氏逝去事 (三三六) 幕
府への叛逆 (三三六) 天皇への叛逆 (三三七) 多々良濱 (三三八)
『太平記』における尊氏 (三三九) 正成兵庫下り (三三九) 土
豪の自信 (三三九) 存命無益 (三三九) 『太平記』の正成像
(三三九) 七生滅賊 (三三九) 大森彦七 (三三九)

熊野信仰文化の源流

近藤 喜博

三三五

——その文學以前——

序 (三三五) クマノ (三三六) 熊野の性格 (三三六) 熊野のマ
タギ (三三七) 祝の業 (三四〇) 原始山の神と熊野と (三四二)
山中の女性と狩獵 (三四三)

高野聖

角川 源義

三三六

關東足利の庄と鑓阿寺 (三四四) 鑓阿寺縁起 (三四七) 色懺悔

の文學 (三四) 二人の「鑿阿」 (三四) 有王の旅 (三四) 瀧
口入道と維盛の死 (三四) 高野聖 (三五) 高野の萱堂聖と
コモ僧 (三五) 千手院谷聖と時衆 (五五) 旅する文藝家
(三五) 時衆と藝能 (三五)

『曾我物語』の背景

塚崎進 三五

曾我事件の薩武者 (三五) 『神道集』と同一作者 (五七) 説
經の臺本として (六六)

寺院と語り物

——大夫房覺明を中心に——

佐々木巧一 三六

劍卷の狂歌 (三四) 清盛は武家の鷹芥 (三五) 寺院と異本
の成立 (三六) 語り物と天台僧覺明 (三六) 『曾我物語』と
「劍卷」 (三六) 『曾我物語』と箱根 (三七) 語り物の管理
者 (三七)

判官蟲貞

古川哲史 三七

判官蟲貞ということばの意味 (三五) 判官蟲貞ということば
のはじまり (三七) 西川如見の『町人義』 (三七) 如見の刻
明な解剖 (三七) 主な成立根據 (三七) 梅檀はふた葉より
芳し (三七) 戀い慕われる義經 (三七) 辨慶との邂逅 (三七)
涙の對面 (三七) 都落ち (三七) 静との別れ (三〇) 義經
像の特色 (三二) 病的な人間像 (三二) 判官蟲貞の思うツ
ボ (三三) 敵役の存在 (三三) 頼朝は敵役ではない (三三)

義經譚の背景

——義經鬼一法眼が所へ御出の事——

臼田甚五郎 三六

敵役としての梶原 (三六) 蚊蟲説とその先蹤 (三八) 徹底
していない悪人化 (三八)

語り物と歌舞伎

戸板康二 三六

登場人物の運不運 (三六) 荒武者と烈女 (四〇) 義經とい
う役柄 (四〇) 武藏坊辨慶 (四二) むきみの隈 (四二) 曾
我狂言 (四三) 虎と鬼王と兄弟 (四四) 語る藝 (四四) 「暫」
の主人公 (四五) 物語の演出 (四六) 修羅能・修羅場 (四六)
七五調のツラネ (四六)

研究史物語

釜田喜三郎 四〇

楠木正成は大泥棒か (現在の研究) (四〇) 戦亂を記して
『太平記』とは (江戸末期までの研究) (四二) 兒島高德が
作者か (明治期の研究) (四二) 『太平記』の五不思議 (大正
期の研究) (四三) 文藝としての價值 (昭和期の研究) (四三)

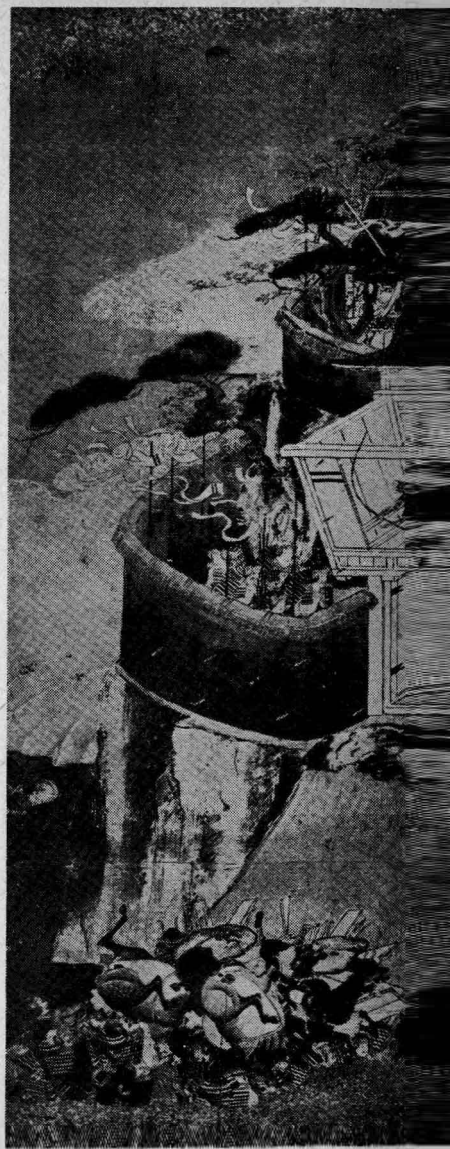
参考文献

釜田喜三郎 四六

太平記

本文鑑賞

岡見正雄



太平記物語

天皇家の北條討伐 源氏が亡び、北條氏が政權を握つて以來、武家の勢力は増大し、承久の亂に破れた朝廷の權威は年々衰えるばかり。九代目の執權高時の代の暴政に人心は北條氏を離れ、時の天皇後醍醐帝は賢聖の聞え高く、祕かに北條氏討伐をはかられ、日野資朝・俊基らは謀議をめぐらしたが、露顯し、武將の土岐氏一黨らは殺され、資朝・俊基・僧圓觀・文觀らは捕われた(卷一)。遂に資朝は佐渡で、俊基は鎌倉で斬罪となり、天皇の身邊も危うくなつたので、ひそかに笠置山へ臨幸され、大納言藤原師賢は天皇の身代りに比叡山へ赴き、六波羅方は比叡山へ帝の行幸があつたと思ひ、押し寄せるが、やがて笠置に大軍が集まり、攻めて来る。一方天台座主の大塔宮尊雲親王は吉野方面に落ちのびる(卷二)。笠置の城も陥り、天皇公卿殿上人は皆捕われた。これより先に楠木正成は勅命を受け、赤坂城を築き、六波羅の大軍を悩ましたが、食攻にされるので、遂に城を焼き逃げの

びる(卷三)。後醍醐天皇は隱岐島へ、尊良親王は土佐へ妙法院尊澄親王は讃岐へそれぞれ配流となつた。天皇が隱岐島へ臨幸の途中兒島高德は院の庄まで後を追うが果されぬ(卷四)。元弘二年(一三三二)三月持明院統の光嚴天皇が即位された。その頃高時は田樂、鬨犬に夢中になり政治を顧みない。一方大塔宮は南都から山伏姿で危い思いをしながら熊野を経て、十津川に赴かれ、遂に吉野の大衆を語らい吉野に城郭を構えられる(卷五)。

地方豪族の蜂起 一方一度姿を隠した楠木正成は天王寺に再び進出し、北條方を翻弄し、天王寺で正成は未來記を披見し、いよいよ戦う決心を固める。北條方は大軍を吉野城・赤坂・千劔破城に向け、赤坂城は水路を斷たれ落城する(卷六)。正成は千劔破城を作つて再び奇略で八十萬の敵手を手玉にとつていた。大塔宮も吉野城で二階堂道蘊を相手に戦つていたが、落城し、村上義光が宮の身代りに自害する間に漸く落ち延びられた。一方新田